

# 視覚障がい当事者団体の情報発信の特徴

－ 5年間のブログ記事に対する一考察－

## Characteristics in information transmission on the Internet by a self-advocacy group of visually challenged individuals

－ a study on blog posts over the past five years －

奈良 里紗（視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”）

村上 卓也（視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”）

渡邊 和宏（視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”）

山本 紗未（視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”）

佐藤由希恵（視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”）

Risa NARA (Lifestyle Support Association for Partially Sighted and Blind)

Takuya MURAKAMI (Lifestyle Support Association for Partially Sighted and Blind)

Kazuhiro WATANABE (Lifestyle Support Association for Partially Sighted and Blind)

Sami YAMAMOTO (Lifestyle Support Association for Partially Sighted and Blind)

Yukie SATO (Lifestyle Support Association for Partially Sighted and Blind)

### 要旨

目的：本報告は、視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”（以下、当団体）において視覚障がい当事者が行っている情報発信の特徴を5年間のブログ記事から検討することを目的とした。方法：対象は2010年7月から2015年12月までに執筆された記事とし、記事に設定されたラベルから執筆内容の特徴を分析した。結果と考察：大カテゴリーの多い順に、生活・コミュニケーション（84件）、学校・勉強（50件）、趣味・余暇・スポーツ（50件）、補助具・便利グッズ（49件）、就職・職場（18件）となっていた。このうち、記事数が最も多い生活・コミュニケーションには12個の小カテゴリーが設定されており、日常生活やおしゃれ、障がいの伝え方等が含まれていた。視覚障がい当事者が情報発信をしやすい内容は日常生活・コミュニケーションに関わる内容であり、就労分野の記事は情報発信しづらい内容であることが示唆された。

キーワード：視覚障がい当事者団体、情報発信、ブログ記事

### 1. 目的

視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”（以下、当団体と示す）は、居住地に関わらずどこでも情報を得ることができるようにするため、

ブログを活用した情報発信を行っている（奈良・山本・渡邊・村上・岩池, 2013）。この情報発信の特徴として、視覚障がい当事者が執筆者となり、日常生活の中で感じる困難に対して、具体的な工夫により解決する方法を経験に基づき

執筆している点である。また、わかりやすい情報発信に努めるため、執筆されたブログ記事（以下、記事と示す）には必ず、当団体スタッフにより編集が入っている。

ところで、このような情報発信をするきっかけとなったのはある病院の患者会での活動である。患者会の活動では、日常生活の中で自分と同様に困難を抱えているピアと出会い、ピア同士の語りからその困難を解決するための工夫について、共有する場となっていた。それは例えば、信号を渡るときの工夫や眉毛のお手入れをする工夫、iphone やタブレット端末等を活用する方法等、実に多様であり、実生活に容易に取り入れることのできる内容が多く存在した。このように、日常生活の困難を解決するために当事者が何気なく行っている工夫について、同じように情報を必要としている当事者に情報を届けるため、ウェブサイトを活用した情報発信を始めた。そして、情報発信を始めて5年が経過し、記事へのアクセスは10万件を超え、情報発信の必要性を改めて確認できた。

そこで、当団体がこの5年間に行った情報発信について振り返り、改めて、視覚障がい当事者が行う情報発信の特徴について検討した結果を報告する。その中で視覚障がい当事者が情報発信として共有しやすい内容とそうではない内容を検討し、今後の情報発信について考える機会としたい。

## 2. 方法

### 2.1. 対象

当事者の情報発信の特徴を検討するため、当団体が2010年7月より情報発信を目的に運営しているブログ記事（以下、記事）を対象とした。対象とした期間は、2010年7月から2015年12月までに執筆された記事とした。

### 2.2. 手続き

記事には、ラベルと呼ばれるカテゴリが設定されている。このラベルは、より詳細なキーワードからなる小カテゴリと、これらの小カテゴリをまとめた大カテゴリの2つのカテゴリから作

られている。本報告では、各記事に割り当てられたカテゴリを算出した。なお、本報告で用いるラベルは、1つの記事の中で複数のカテゴリに関連する内容が含まれている場合、複数のカテゴリを設定できるようになっている。そのため、結果に示す件数は単純な記事数ではなく、ラベルが割り当てられた記事数であることを書き添える。以下、大カテゴリを【 】、小カテゴリを《 》で囲んで示した。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 大カテゴリの特徴

まず、大カテゴリとして設定されたカテゴリ名とカテゴリに含まれるブログ記事の件数は、【生活・コミュニケーション】84件、【学校・勉強】50件、【趣味・余暇・スポーツ】50件、【補助具・便利グッズ】49件、【就職・職場】18件となっていた（図1）。これをみると、【補助具・便利グッズ】までは約50件以上の記事があることに対して、【職場・就職】については18件と少ないことが示された。これは、実際に情報発信を行っている当事者の多くが本名で記事を書いているため、今現在所属する会社での出来事について誰もが閲覧できるブログという媒体での情報発信を躊躇するためと考えられる。しかし、就労先での当事者の実体験に基づく工夫について情報を必要としている当事者、あるいは、支援者は多く存在すると考えられるため、執筆者が積極的に記事を書く事ができるような団体としての環境整備に努める必要があるだろう。

### 3.2. 小カテゴリの特徴

ここでは、大カテゴリで最も多いことが示さ

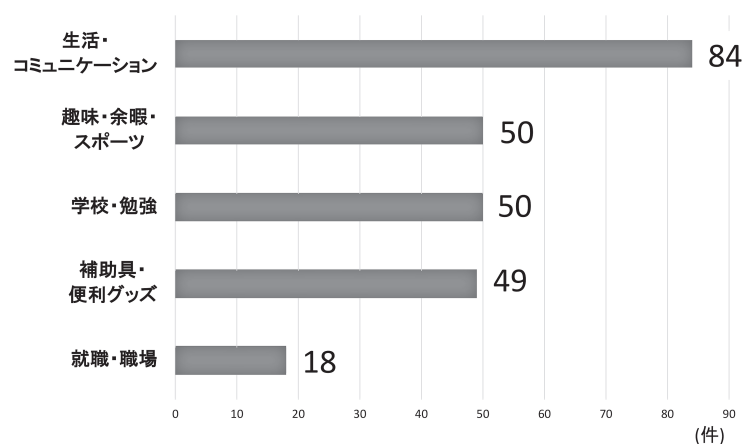


図1 大カテゴリの記事数

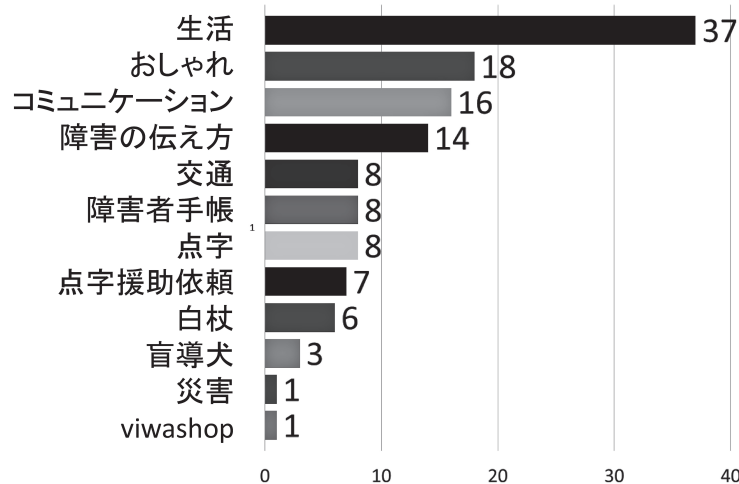


図2 生活・コミュニケーションに含まれる小カテゴリ別記事数

れた【生活・コミュニケーション】に設定された小カテゴリについて報告する。小カテゴリとして、《生活》37件、《おしゃれ》18件、《コミュニケーション》16件、《障がいの伝え方》14件、《交通》8件、《点字》8件、《障害者手帳》8件、《援助依頼》7件、《白杖》6件、《盲導犬》3件、《災害》1件の11個のカテゴリが設定されていた(図2)。

ここからは、10件以上の記事が示された《生活》、《おしゃれ》、《コミュニケーション》、《障がいの伝え方》の4個のカテゴリについて具体的な記事をあげながら紹介する。まず、《生活》には、“買い物での工夫～ブランドショップで感じたこと”、“地方で暮らす視覚障害者、あなたの工夫教えて!”、“外食初心者の方にオススメ! 視覚障害者一人での外食”、“バッグの中身の整理整頓の工夫”等、当事者たちの生活に密着した工夫が記事としてまとめられていることが特徴である。特に、自分自身の生活の中では当たり前に行っていることだが、視覚障がいのある人にとっては生活を豊かにするための工夫になるのではないかと当事者本人が気づいた内容をまとめていることが特徴的といえる。次に、《おしゃれ》では、viwa Beauty というおしゃれに関連するインタビュー記事や“ちょっとマスカラ

が……その一言のサポートが嬉しいんです!” のようにおしゃれに当事者が失敗したときに嬉しかった周囲のサポートに関する経験談等が綴られていた。《コミュニケーション》では、“ヘアカットはどうしていますか?” では美容師とのコミュニケーションに焦点を当て、また“道案内”という記事では実際に友人に言葉の道案内を受けたとき、何がわからなくて困ったのか、どういうふう以案内してもらえれば自分でもわかったのかを自身の経験から紹介していた。最後に、

《障がいの伝え方》では、先天性弱視の大学生が執筆した“私の見え方が紹介できるようになるまでと現在の工夫”という記事や社会人で海外出張を多くこなす先天性弱視の方が“英語で自己紹介”という記事の中で、簡単な英語表現で、かつ、どういうふうなジェスチャーをすれば伝わるかわかりやすく解説する記事が含まれていた。

以上のように、当事者が積極的に情報発信をしやすい内容としては、実際の生活場面に密着した内容であることが示唆された。また、生活やコミュニケーションの中でも白杖や盲導犬といった内容より、障がいの伝え方やコミュニケーションに関連する記事が多い背景としては、執筆者のほとんどが弱視者であり、白杖もほとんど常用していないため、日常的にコミュニケーションや障がいの伝え方に工夫や課題を感じているためと推察される。

## 文献

- 1) 奈良里紗・山本紗未・渡邊和宏・村上卓也・岩池優希 (2013) 視覚障がい者支援におけるソーシャルメディア活用の可能性. 視覚リハビリテーション研究, 2(2), 67-70.